

コラム 苦学生に活かされた山本有三の奨学金

山本有三は明治大学文科専門部文芸科科長の職を勤めながら、作家活動も行っていました。昭和8（1933）年11月3日には、前年から東京・大阪朝日新聞で連載していた『女の一生』を中央公論社から刊行しています。

有三はこの初版の印税三千円を、二千円は学生の奨学金として、千円は文芸科研究室の図書購入費として、明治大学に寄付しました。さらに、昭和10年には雑誌「主婦之友」に連載する「真実一路」の原稿料二千円を同大学に寄付し、寄付総額は五千円*1)にのぼりました。

この奨学金を受けた学生の一入である関口次郎は、昭和12年に文芸科を卒業後、北海道新聞社に就職。昭和36年に同社の取締役役に就任します。その翌年、有三から受けた恩義に報いるとともに、当時の自分のように苦勞している学生に役立たせることができたらと、十万円*2)を明治大学に寄付しました。関口の訪問を受けた有三は、25年の時を経て大成した卒業生の申し出に非常に感激したといっています。*3

*1、2 昭和7年の文芸科の年間授業料は百円。また、昭和40年の年間授業料は三万円。
(参考：「明治大学文科要覧」昭和7年、「明治大学学則」昭和40年)

*3 参考：「週刊明治大学新聞」昭和37年4月12日号

(文芸企画員・学芸員 橋口 里菜)



『女の一生』(中央公論社 昭和8年11月)

第8回

三鷹市山本有三記念館 スケッチコンテスト作品募集

四季折々の姿を見せる山本有三記念館をあなただけのタッチで描いてみませんか。コンテスト終了後、受賞作品は山本有三記念館で展示いたします。有三記念公園は入場無料です。お気軽にスケッチにお越しください!

募集期間：令和4年10月1日(土)～12月18日(日)

コンテスト：令和5年1月21日(土)～29日(日)

会場：三鷹市公会堂さんさん館2階展示室

受賞作品展示：令和5年2月1日(水)～3月5日(日)

会場：三鷹市山本有三記念館

※応募詳細につきましては、当記念館までお問合せいただくか、ホームページをご覧ください。

事業報告

2月 山本有三記念館 三鷹ネットワーク大学共催講演会 「路傍の石」を読み直す～吾一少年と雑誌の時代～

企画展「路傍の石」に描かれた少年(会期：令和3年9月11日～令和4年3月6日)の関連企画として、フリーの編集者兼ライターとして活躍中の円満字二郎氏をお招きし講演会を開催しました。「路傍の石」の主人公・吾一に採り入れられた出版創業者たちの経歴や、当時の出版・印刷事情といった時代背景について詳しく解説いただきました。新たな視点で作品を読み直す講演内容に、参加者からは「路傍の石」をもう一度読み直してみたい」という感想が多数寄せられました。



5月 第13回 春の朗読コンサート

5月13日・14日、朗読家・野田香苗さんとフルート奏者・長谷川広美さんをお招きし、朗読コンサートを開催しました。山本有三の三鷹時代の作品「はにかみやのクララ」をはじめとする朗読に合わせ、多彩な楽曲を演奏していただきました。来場者からは「朗読とフルートがよく調和して情景が目に見えるようだった」などのお声をいただきました。



《ガイドボランティア》

土・日・祝日の午後1時から4時まで解説を行っています。事前申込は不要ですので、お気軽に声をおかけください。
※新型コロナウイルス感染症対策のため、休止している場合がございます。

編集・発行

三鷹市山本有三記念館



〒181-0013 東京都三鷹市下連雀 2-12-27
TEL: 0422-42-6233
URL: <http://mitaka-sportsandculture.or.jp/yuzo/>

過去の企画展館報をホームページで公開しています。 @BungeiMitaka

開館時間：午前9時30分～午後5時
休館日：月曜日及び年末年始(12/29～1/4)
月曜日が祝日の場合は開館し、翌日と翌々日を休館
入館料：300円(20名以上の団体200円) 年間パスポート1,000円
・中学生以下、障害者手帳持参の方とその介助者、校外学習の高校生以下と引率教諭、「東京・ミュージアムぐるっとパス2022」利用者は無料
アクセス：JR中央線「三鷹駅」南口より徒歩12分
JR中央線・京王井の頭線「吉祥寺駅」南口(公園口)より徒歩20分
三鷹駅南口よりみたかシティバス「むらさき橋」下車徒歩2分
吉祥寺駅南口より小田急バス「万寿橋」下車徒歩5分

三鷹市山本有三記念館館報 Yuzo Yamamoto Memorial Museum Report

第25号
2022年9月

山本有三

— 作家として、教育者として —

令和4年9月10日(土)～令和5年3月5日(日)

山本有三〔1887—1974〕は、明治、大正、昭和の長きにわたり劇作家および小説家として活躍した人物です。また、作家業にとどまらず、青少年の育成や議員職など、多角的な活動をしたことでも知られています。

特に青少年の育成には生涯をとおして並みならぬ熱意を注ぎ、児童向け叢書『日本少国民文庫』（昭和10～12年）の編纂や、自邸で蔵書を開放した（ミタカ少国民文庫）（昭和17～19年）の活動、小学校用教科書『山本有三編集国語』の刊行（昭和27年）など、次代の担い手である青少年の教育に心を砕きました。

文藝春秋新社の編集局長であった池島信平は、昭和34年の対談において、山本有三には「教育者としての何か」*1)があるのではないかと言及しています。その教育者としての出発期とも位置付けられるのが、昭和7（1932）年から11年にかけての明治大学文科専門部文芸科長としての活動でした。

昭和6年、明治大学では、長らく学生の募集を停止していた文学部を新たに文科専門部として復活させることに決め、そのうちの1科である文芸科を「作家を作る所」*2)と定めました。科長を務める人物には、作家かつ学者であり、文壇方面に有力な人物が求められ、大学がふさわしい候補者と見込んだのが山本有三でした。

当時の有三は、「波」（昭和3年）、「風」（昭和5年）といった長編小説を「東京・大阪朝日新聞」に連載し、すでに文壇の大家としての風格を漂わせていました。また作家の著作権擁護に尽力していたほか、「小学国語読本」の改善に一言するなど、社会的な行動力を持つ人物として目されていました。

大学は「第一候補山本有三、第二候補山本有三、第三候補山本有三」*3)というほどの熱意で交渉に臨み、科のプラン編成の全てを一任するという条件を提示して説得にあたったといっています。

しかし、文壇の第一線で活躍していた有三にとっ

て、作家とは「成る」ものであり「作るべきものではない」*4)という動かしがたい考えがあり、文芸科を「作家を作る所」とする考えは首肯できぬものだった。熱心な説得を受け、科長職を引き受けはしたものの、「作家を養成し、仕立てあげようなどという心はみじんもない」*4)という考えを貫き、学生自らに文学を「会得」させるための独自の科を作り上げようとした。

有三が文芸科において目指したのは、暗記や誦達みによる文学知識の教授ではなく、文学を通して学生たちのなかにあるよい芽を伸ばすことでした。里見弴、豊島與志雄、岸田國士といった錚々たる文壇人を講師として招請し、学生たちと密接に関わらせることで学生が自身の人生に活かし得るものを学び取らせようとした。

在任期間は4年にとどまりますが、有三が築き上げた文芸科は、その偉観を誇る講師陣の顔ぶれと、型にはまらぬ指導内容とで、今もなお同大学のなかで異彩を放っています。

本展では、有三の文芸科長就任90周年を記念し、作家として、また教育者として、両輪で活躍した昭和7年から11年までの活動に焦点を当ててご紹介いたします。文芸科長としての活躍を報じた新聞や、長編小説「女の一生」（昭和7～8年）の自筆書き込み入りの新聞切り抜きなど、多彩な資料とともにお楽しみください。

*1：山本有三池島信平吉野源三郎「文壇よもやま話 山本有三の巻」(昭和34年6月) (文壇よもやま話「上」) 中央公論新社平成22年10月より
*2：「明治大学 臨時商議委員会議事録(昭和7年2月)」(資料) 明治大学教育制度発達史稿(6) 明治大学広報課・歴史編纂資料室 昭和56年3月より
*3：渡辺世祐・藤沢衛彦・菅藤高徳・大木直太郎・宗京斐三「座談会 文化創立をめぐって(昭和27年)」(資料) 文科専門部の創設 明治大学文学部 昭和54年3月より
*4：山本有三「卒業製作選集のあとに」(明治大学文芸科卒業製作選集 第一輯) 健文社 昭和10年6月

山本有三と明治大学文芸科

松下 浩幸(明治大学教授)

夏目漱石の年譜をみると「明治三十七年四月、明治大学講師」という記述が目につく。これはかつて明治大学の文科(文学部)に漱石が兼任講師として出講していたことを示すものである。文科の設置は漱石が就任したまさに明治三十七年四月のことであったが、しかし文科への進級者が少なく、開講は三十九年九月まで延期される。その間は予科学友会という文芸サークルや文学研究会などの集まりで代替の授業が行われ、漱石もここで講義をしている(三十九年一月辞職)。三十九年ようやく正規の授業が開始されるが、同時期に京都に二つ目の帝国大学ができ、そちらに教師陣を取られたことなどもあり、結局学生が集まらず、一度だけ卒業生を出しただけで明治大学の文科は閉鎖される。だが、制度上、廃止されたわけではない、あくまでも募集中止という形で残ることとなる。

当時の明治大学は法・政・商といういわゆる「世間学」(実学)の学部を持つものの、総合大学としての形を整えるためにも「人間性の研究」を行う文科設置の必要性があった。しかし、学生募集の面からなかなか実現できないという状況にあった。そのような中、創立五十周年を契機に文科復活の機運を高めるべく、設置運動が本格化することになる。そして昭和七年五月、紆余曲折を経たのち、ようやく新生文科が再スタートする。

(イギリス文学)、長与善郎(文芸論)、船橋聖一(源氏物語)、高橋健二(ドイツ文学)、米川正夫(ロシア文学)、谷川徹三(美学)、久保田万太郎(俳句研究)、岩田豊雄(獅子文六)(文芸論)、吉田甲子太郎(米文学)などの豪華な講師陣が集められた。

当時、学生であった者はその時の様子を「教授と学生がひざをつき合わせてやるような授業であった。」^(注1)と言、「里見組、岸田組、豊島組、横光組等に分かれて、時には学外の根城に集り講義をした。コピーをすすりながらのデイスカッションであった。またその他の先生の講義も時々こうした場所で行ったのである。たまにはビールが出ることもあった。蛇足を加えると、それぞれの先生の出費で先業も楽ではなかったであろうと思う。こうした行き方の中からじかに教授の人格、人間性、思想、或は



山本有三と文芸科講師たち(昭和7年4月)(画像提供:明治大学史資料センター)

論理と論理のひだにあるものがない。じみ出て来て教えるものと教わる者との一体にとけこむような効果をもたらしただけである。まさに、これは山本有三の教育感であった。真の教育と

新しい文科は専門部(専門学校)として文芸科(昼間)と史学科(夜間)、そして高等研究科(夜間二年制、大学・専門学校卒業生対象)として新聞科の三つの専攻を擁することになる。中でも文科の中心的存在であった文芸科の顔となるべき科長を誰にするかは重要な課題であった。官学アカデミズムとは一線を画す、作家養成並びに幅広い芸術教育を理念に据えた文芸科に相応しい人物は誰かとなった時、実作者としての実績と研究者的資質を兼ね備えた人物として、山本有三の名前があがったのである。

有三は「当大学から文芸科のことを主宰するやうにどの勸説を受けた時、まさきき自分の頭に起ったのは、文学は教へ得るものではないという考であった。だから自分は、極めて懇篤なお勧めであったにも拘らず、その際はつきりお断りをした」と述べている。だが、「再三再四の熱烈な説得を受けているうちに、ふと自分の肚の中にある考へが芽生えて来た。文学は勿論教へるものではないが、会得させる——少くとも、会得への契機、媒介、指導というようなことなら出来ないこともない、と思うようになった。そしてそのような学校が、何処かに一ヶ所ぐらいあってもいい、という信念に達したので、ついにこの重任をけがす事になったのである。」とその際の心境を語っている(注1)。

また「私はこの科を普通の学校というよりは、文芸科(注2)」と述べている(注3)。

また、山本有三は当時、朝日新聞に連載していた小説『女の一生』を単行本として出版した際、その印税を「女の一生を書いたけれど、これを男の一生の為にしたい」(当時、文芸科の学生は男子のみ)とユーモアを交えて第一回の印税を学生のための奨学金として寄付することを申し出ている。有三は明治大学の校歌のレコードを買って来て家でかけるなど愛校の念を持ち、また自身が苦学した経験から学生の経済的援助の必要性を感じていた(注4)。当時の学内報には「山本科長は去月二十九日午後一時、文芸科幹事吉田教授を伴って専務理事に面会し、中央公論社から受取った印税三千元の小切手のまま、左の希望条件を附して寄附を完了した。使途希望条件 一、二千元也 文芸科関係奨学金 二、文芸科研究室備付図書購入費 右の中、その一条に文芸科関係とあるが、卒業早々適当な就職なくして生活上支障を来す者のうち、幾分でも奨励してやれば、天分を伸ばし得る見込の者にも支給し得られるようにとの希望である。」とある(注5)。これなども文学を志すことの難しさと同時に、学生の志を支援したいという有三の想いがうかがえるエピソードである。

一方で、有三は「真面目に登校出席している学生に痛棒を喰はすものは、教師の無断休講であるから、その点よろしく御注意ありたい」と文科第一回目の全教師顔合わせの会で注意を促したという(注6)。何事にも実直であった有三は、遅刻をしてくる学生に対しても厳しかったが、教師にも同様の厳しさを求めたのである。

その後、有三は昭和十一年に眼疾によって辞任し、

芸修業者のための一つの道場として考へている。教へるとか、詰め込むとか、暗唱させるといふようなことに重きをおかないで、学生みづからが自身の力で「味わう」。「端的に会得する。」「自分の中にある芽を伸ばす。」^(注7)そういう点に主眼をおいている。すなわち他動的でなしに、学生自身をしてみずから工夫発明させることを念としている。これは必ずしも創作に志す人々にだけ必要なことではない。広く文学的な高い教養をおさめたいと望む人々にも、欠くべからざる要件であると思う。」とその教育方針を語っている(注2)。

文芸科の初代科長となった有三のこのような教育理念の下、文科の授業では教室における講義以外に、演劇・映画・美術などの鑑賞や鉱山・刑務所などの見学というユニークで実践的な活動が行われた。また、当時すでに文壇で活躍していた有三の交友関係を中心に、豊島与志雄(創作指導)、里見弾(文芸論)、岸田國士(創作指導)、小林秀雄(ポードレール、ランボー)、横光利一(創作指導)、萩原朔太郎(フランス象徴詩)、土屋文明(万葉集研究)、阿部知二



昭和6年頃の山本有三(出典:近代日本人の肖像)

科長職は岸田國士が引き継ぐことになる。時代は戦争へと向かい、大学や学問にとつては厳しい状況が取り巻く中、三代目の文芸科長・豊島与志雄の時には昭和十六年に卒業の繰り上げが行われ、昭和十九年には新入生の募集停止、そして勤労動員による休講といった試練が続く。戦後、文科専門部は昭和二十四年の新制大学文学部設立に向けて再出発することとなる。現在、明治大学の文学部は文学科、史学科、心理社会学科の三学科を擁するが、その中の一つ、文学科の源流はまぎれもなく昭和七年に山本有三らによって行われた文芸科復興にある。

(注1)「駿台新報」昭和八年三月十八日三四四号。引用はいずれも『明治大学文学部五十年史資料叢書II 資料文科専門部の創設』(昭和五四年三月)より。
(注2) (注1)に同じ
(注3) 久富正「追想「山本有三」」明治大学文学部五十年史資料叢書VII 文芸科時代II (1982~1985) (昭和五六年三月)
(注4) 「駿台新報」昭和八年十一月十一日三六六号
(注5) 「駿台新報」昭和九年五月五日三七九号
(注6) 「駿台新報」昭和九年六月九日三八二号



松下浩幸(まつした・ひろゆき)
明治大学農学部教授。明治大学史資料センター運営委員。一九六〇年、大阪府生まれ。専門は日本近代文学。著書に『夏目漱石-Xなる人生-』(NHK出版)、共著に『異文化体験としての大都市—ロンドンそして東京』(風間書房)、『怪異とナショナリズム』(青弓社)など。